

2017年1月1日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 5章 13～25節

説教題：いのちのことばを語りなさい

1 みなは一つ心になって

今年も主のみことばに励まされながら歩んでまいりたいと願います。きょうからまた使徒の働きに戻ります。前回から少し時間が経過していますので、これまでの流れを短くふり返ります。

イエスの十字架の死からちょうど五十日目、すなわちペンテコステと呼ばれる日に、天から激しい風が吹いてくるような響きが起こります。そのとき祈るために家の中に集まっていたのですが、彼らは外国語を知りません。ところが突然にいろいろな国のことばを滑らかに話を始めます。何事が起きたのかと不審に思って集まって来た町の人たちはこれを見て驚き、酒でも飲んでいるのはと怪しみます。

ペテロはこの機会を捉え、集まってきた人たちに、「あなたがたは神が遣わされた救い主イエスを十字架で殺しました。だから悔い改めてこの曲がった時代から救われなさい」と勧めます。これを聞いて心刺された人たちはバプテスマを受け、この日三千人の人々が救われました。このようにして最初の教会がエルサレムの町に建てられていきます。

すべてが順調に進んでいるように見えたあるとき一つの事件が起きました。アナニヤとサピラのふたりは、持ち物を売った代金の一部を自分のポケットに入れ、教会にはそのことを隠したまま申告してしまいます。自分たちが大きな犠牲を払ったようにして見栄を張ろうとしたのです。ペテロはふたりの嘘を見抜き、この事実を指摘すると、ふたり

はたちまち息絶えてしまいました。この出来事を機に、教会はますます一つ心となっていった。それが前回までのあらすじでした。

2 加わろうとしない人々

1) 教会の人々を尊敬していた (13節)

このようにして悔い改めた人たちが教会に集まっていくのですが、一方で、教会の中に入らずと距離をおいたままの人たちも沢山おりました。警戒していたのかということそうではない。13節に「その人々は彼らを尊敬していた」とあります。なぜ尊敬していたのでしょうか。使徒たちが、大祭司やサドカイ派の人たちの脅迫にも屈しないで宣教活動をしていたからでしょうか。あるいは、使徒たちがしるしと不思議を沢山行っていたからでしょうか。でもどんな時代でも、いろいろな妨害や脅迫を受けても負けないで活動している宗教団体がありました。しるしや不思議を行う宗教はキリスト教に限らない。いくらでもあります。脅迫に負けず信仰を貫くこととか不思議を行うこと。いずれもすごいなと思うことはあっても尊敬するかどうかはまた別の問題です。

では何が人々の心を引きつけ、尊敬の念を持つようになったのか。おそらく34節のことではないかと思えます。「彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。」

当時、裕福な暮らしをしている者がいる一方で、物乞いをしなければならぬ人たちもいて、非常に貧富の差が激しかった。今なら政治の力で解決するべきだという話になり

ますが、当時はそんな考え方はありません。貧しければ物乞いをするしかなかった時代でした。

そこへ世界最初のキリスト教会が建てられ、いろいろな人たちが来るようになりました。金持ちばかりではない。貧しい者もいれば病気の者もいます。そんなとき、バルナバが現れました。彼は自分の持ち物を売り、それを教会に献げることで、必要がある人たちに分けられるようにしていきます。教会から始まったこれらの活動は、やがて世間でも認められるようになり、今私たちが知っている病院とか社会福祉施設と呼ばれるものに発展していきます。当時はまだそんな考え方がなかった時代です。まして個人の財産を献げてするわけですから、人々が強い印象を持つのは当然で、これらのことが尊敬される要因になっていきます。

2) いのちのことばを語りなさい (20 節)

また一方で、教会の活動を苦々しい思いで見ている人たちもいました。今日の箇所にも登場する大祭司やサドカイ派の人たちです。サドカイ派は、大祭司の家系につながる人たちが復活を信じません。宗教家を名乗ってはいますが、きわめて世俗的な人たちです。ですから、ペテロがしきりにイエスの復活を唱えているのが気に入りません。あるとき、ペテロとヨハネが神殿で演説しているとき、難癖をつけて逮捕してしまいます。でも、人々が見ているので手荒なことはできません。しかたなく釈放はしたのですが、大祭司たちの気持ちはおさまりません。いつかきつと落とし前をつけなければと機会を狙っていました。それが 18 節以降の出来事です。とうとう使徒たちを捕らえ、留置場に投げ込んでし

まいます。しかしその夜、主の使いが現れ牢の中から使徒たちを連れ出しこう語りました。20 節。「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばを、ことごとく語りなさい。」

人々というのは誰のことか。13 節にも出ていました。教会の働きを見て尊敬はしているけれど、加わろうとしなかった人たちのことです。その人たちに語り続けなさいと、御使いは教えました。

ここから大切なことを教えられます。皆さんも経験があると思います。教会に誘ってもなかなか来てくれないということがあります。あるいは、一度は来てくれたけれど、あとは来ない。そんな結果を見るとなんだかがっかりすることがあります。でも聖書に何と書いてあるか。「人々にこのいのちのことばを、ことごとく語り続けなさい」とある。すぐに受け入れなかったとしてもあきらめる必要はない。とにかく語り続けなさい。

私たちは目の前のことだけを見て、一喜一憂する気の短いところがあります。神という方は実に気が長い。イスラエルがどんなに罪を犯しても、数千年の長きにわたって救いのみことばを語り続けるほどです。どんなに受け入れなくても、人々にいのちのことばを語ろうとする。それはなぜか。神は私たちをひとりでも多く救いたいからです。だからここでも、わざわざ使徒たちを牢の中から連れ出して、語り続けなさいと言うわけです。

3) 教える (25 節)

さて次の朝のことです。大祭司とその仲間たちが中心となり、議会とイスラエルの長老たちを招集し、使徒たちを連れ出して裁判にかけようとしています。ところが牢の中はもぬけ

の殻。鍵はきちんとかけており、番人もちゃんと役目に就いていた。どこにも逃げられるような穴はない。それなのに彼らは忽然と姿を消してしまった。何が起きたのか誰も説明ができない。そんなところへ新しい情報が飛び込んできました。25節。「大変です。あなたがたが牢に入れた人たちが、宮の中に立って、人々を教えています。」

3 いのちのことば

1) なぜ語るのか

牢から解放された使徒たちは、主の使いに言われたとおりにすぐに宮へ向かい、人々に向けて語っていました。それにしてもなぜ彼らはこうも熱心に語るのでしょうか。

ルカの福音書 24 章 46, 47 節。「(聖書には) 次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらのこと証人です。」

使徒たちは、イエスが天に上げられる前に語ったことばを忘れません。自分たちがイエスの証人として選ばれていることを自覚しています。だから語ります。

2) 誰か語るのか

でもイエスが選んだ証人とはどんな人でしょう。普通は、たまたま事件現場に居合わせて、事件の細かいところを自分の目で見て自分の耳で聞いた人たちが証人となります。でも聖書で言う証人は、たまたま私は事件現場を通りかかっただけですという意味ではない。イエスの十字架という事件。あの十字架を目撃した、イエスのことばを聞いた、そ

れらすべてが自分の罪のことだと深く自覚している。イエスはそのような人たちを証人として立てます。ペテロのことは何度も言いました。いざというときに自分の先生であるイエスを見捨ててしまった。自分も神のひとり子を十字架で殺した者のひとりである。そういう自覚を深く心に刻んでいます。そんな人たちがいのちのみことばを語っています。

3) 何を語るのか

いったい何を語ったのでしょうか。次回の所を先取りして 30、31 節を読みます。「私たちの父祖たちの神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスを、よみがえらせたのです。そして神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、このイエスを君とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。」

いったい誰がキリストを苦しみに会わせたのでしょうか。十字架で苦しむイエスを見捨てたのは私です。そしてあなたもです。何も話すなと脅そうとしているあなたがたも、人々を扇動しイエスを十字架にかけて殺したのではないか。その罪を悔い改めて赦していただきなさい。使徒たちはそのように語ります。でも大祭司たちは認めません。

私たちはどうでしょう。自分がイエスを十字架で殺したことを認めるでしょうか。二千年前です。日本ではない中東の小さな国の出来事です。私と何の関係があるのか。最初はそう思います。本当に関係がないのでしょうか。でも、私たちのうちに人をだまし、人をねたみ、人を殺そうという思いを隠し持っているならばどうでしょう。神は私たちの心の中のことをご存じだということです。十字架で死んでくださった神がです。三日目によみがえられた神が私たちのうちにある罪を知っ

てくださっていると言うのです。ということは、二千年前の十字架は今もなお私たちの目の前に立っていることにならないでしょうか。

私たちは、この十字架の前に出て行きたいと願います。